

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2003年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科		比較文明学専攻	
指導教員	所属・職名			氏 名			
	文学部・教授			佐々木 一也 印			
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>		個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 1名			
研究課題	液状化するモダニティのメカニズム：ジグムント・バウマンの社会理論をめぐって						
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年			氏 名			
	文学研究科・比較文明学専攻・博士課程後期課程3年			向後 剛 印			
研究組織	在籍研究科・専攻・学年			氏 名			
研究期間	2003		年度				
研究経費	200		千円				

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

モダニティの構造変容の分析は現代社会理論にとっての最重要課題となっている。本研究ではこの分野に大きな貢献をしている社会学者・社会思想家ジグムント・バウマンの思想を分析、検討する。モダニティの発想に依拠した社会制度、価値観が解体される過程は新たな自由だけでなく、いわば実存的不安をももたらしている。既に多くの蓄積があるグローバル化の政治経済学的研究に加えて、文化的社会的な側面の分析が必要とされる所以である。規律訓練を通じた抑圧の仕組みであると同時に、人々に安定した生の枠組みを与えていたモダニティの構造の液状化過程に関するバウマンの議論を検討することで、新しい社会理論の方向性を探りたい。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ジグムント・バウマン] [ポストモダニティ] [グローバリゼーション]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

現在までバウマンの著書は4冊翻訳されているものの、日本においては本格的な研究はまだほとんど存在しないといえる。本研究では、キース・テスターによるバウマンへのインタビューを収録した Zygmunt Bauman and Keith Tester, 2001, *Conversations with Zygmunt Bauman*, Polity. およびバウマンについての先行研究である Dennis Smith, 2000, *Zygmunt Bauman: Prophet of Postmodernity*, Polity. や Peter Beilharz, 2000, *Zygmunt Bauman: Dialectic of Modernity*, Sage. および *Theory, Culture & Society* 誌第15巻1号(1998年2月)の「バウマン特集」掲載の諸論文を参照しながら、バウマンの知識人としての経歴とその思想の特質について概観し、著作の分析を進めた。本研究が主な検討の対象として考えていたのは1990年代に発表されたポストモダニティの問題に関わる諸著作であった。80年代後半の、*Legislators and Interpreters: on Modernity, Post-modernity, and Intellectuals* (87年)、*Freedom* (88年)、*Modernity and the Holocaust* (89年) 等での議論から90年代に問題化される主題への移行、接続がどのようになされているのかを見るのが一つのポイントであった。

知識人論である *Legislators and Interpreters* においてバウマンはモダニティからポストモダニティへの移行を知識および知識人の社会的位置づけという観点から論じている。前近代の比較的安定していた共同体的世界がモダニティの到来により激しく変動していく過程で、そこに普遍的、合理的、機能的、効率的な秩序を構築すること、その目的にかなう知識、理論を生産することが知識人の役割であったとバウマンは規定している。変化と秩序の不安定な関係性がモダニティのダイナミズムを作り出していったと捉えられているのであるが、知識人は秩序をデザインするだけでなく、その実践にも関わる「立法者」(その権威と権力は国民国家を後ろ盾にしていた)としてふるまっていたとバウマンはいう。アマルフィ賞を受賞した *Modernity and the Holocaust* でバウマンは、この前提を踏まえて、目的合理性、効率性を追求する立法者の理性に基づく社会編成が生み出した暗黒に目を向けている。本書では、ホロコーストは近代化によって克服されなかった「野蛮さ」の暴発であるという見解が批判される。バウマンによれば反ユダヤ主義だけではホロコーストを説明することはできない。それは「完全な秩序」を夢見るモダニティの発想と結合することで初めて他に類を見ないジェノサイドを招来したのである。社会生活からの暴力の消去(より正確に言えば合法的権力による強制手段の独占による秩序の達成)をめざした「文明化の過程」自体が最大の暴力の発動を可能にさせる条件を準備したという逆説をバウマンは強調する。バウマンのホロコースト論は既存の社会学への強い批判を含んでいる。モダニティによって生み出され、モダニティを自己理解、自己正当化する性格を持ってきた社会学が、モダニティ(文明化の過程)の逆説に真剣に向き合うことで、自らを批判し、再生することが求められているのである。

Legislators and Interpreters でバウマンは、合理性に基づいて秩序を構想することの根拠が現代社会で徐々に希薄になってきていることを指摘し、差異、多様性、偶発性の契機が優勢になっていく傾向によって、知識人に期待される機能が「立法」から「解釈」へと転換していくと主張した。モダニティの固定的な秩序は、実際には普遍的ではないにもかかわらず普遍性を装いながら、地域や社会階層により異なる人々の生の諸様式を同質的なものに還元しようとする抑圧の仕組みでもあった。この仕組みの形成、維持に深く関与していた「立法者」的知識人が、「解釈」というより慎ましい行為へ自己の役割を限定するようになることをバウマンは望ましいこととして理解していたようにも見える。また、このような近代的合理主義批判は同時代の知的世界の雰囲気とも連繋していたように思われる。しかし、バウマンが意図していたのは単純なポストモダン礼賛ではなかった。90年代のバウマンが展開する現代社会批判は、むしろ古典的な知識人のスタイルに沿って行われているようにも見えるのである。

Modernity and Ambivalence (91年) で主張されるように、合理的秩序を追求するモダニティは同時に、秩序に統合しきれない曖昧なもの、「よそ者」を産出し続ける。*Liquid Modernity* (2000年) においてバウマンが液状化と呼ぶモダニティの現代的変容の過程は、アンビヴァレントな存在を秩序化する権力構造を弱めていく。しかしこのことは、社会から抑圧、暴力、恐怖が消失することを意味しない。人為による合理的秩序の建設をめざす営為は、強制的同質化の仕組みであると同時に、他方では人々が自己の生活やアイデンティティを一種のプロジェクトとして構築していくために欠かせない安定性、確実性、予測可能性を保証してきた。多様性、差異、柔軟性を旗印にする社会秩序が優勢になり、ソリッドな秩序を構築しようとする試みが徐々に放棄されていくことは、能力と資源を持つ人間にとっては自由の拡大を意味するが、社会的にアンビヴァレントな存在にとってはむしろ不確実性によって翻弄される恐怖の経験である可能性の方が強い。

研究成果の概要 つづき

モダニティの権力がいわゆる規律訓練を通して、被支配者の境遇に積極的に介入する戦略をとっていたとするならば、現代の支配的秩序において権力が採用する「非関与 (disengagement)」の戦略は、社会的弱者、市場競争の敗者を無用化、無力化、スティグマ化し、さらに彼らの苦境を例えば「自己責任」の言説によって正当化していくという二重の抑圧の構造を持つ。バウマンの議論で重視されているのは、モダニティからポストモダニティ (リキッド・モダニティ) への移行が生産社会から消費社会への転換と連動していることである。バウマンは既に *Freedom* や *Legislators and Interpreters* で、ポストモダンの消費社会が市場のゲームに参加する能力、資格を持たない人々を「よそ者」として周縁化していくメカニズムを持つことを指摘していた。市場における消費行為があらゆる社会的行動の基準として位置づけられる一方で、消費社会を批判的に見る視点、現在存在するものとは異なる社会のあり方を模索する視点が醸成されなくなることへの批判が 90 年代のバウマンの関心となっていた。この点においてバウマンの議論には 80 年代からの連続性があることを確認することができる。

モダニティにおける全体主義の悪夢は公的領域の力が私的領域を支配、制圧してしまうことであった。バウマンがリキッド・モダニティについて危惧しているのは、公的領域と私的領域の関係の逆転、転倒という現象である。*In Search of Politics* (98 年) では、私的領域の論理 (経営者の論理、消費者の論理) が公的領域を浸食し、政治的なもの、社会的なものへの関心が縮小されていく事態に批判の焦点が合わせられている。

バウマンがモダニティの変容を問題化する著作を発表し始めたのは冷戦構造が崩壊していった時期である。ポーランド生まれのバウマンはナチスを逃れ旧ソ連で高等教育を受け、戦後戻ったポーランドをも追われ、70 年代からイギリスで活動を続けていた。80 年代末から 90 年代を通じてバウマンは、かつての祖国を含めた旧社会主義圏に自由主義市場経済のシステムが導入され、多くの混乱が引き起こされていく過程を見ていた。同時にバウマンは現在の居住地であるイギリス社会がグローバル化に対応する過程で新自由主義的改革と政治的保守主義のアマルガムによって変貌していく状況を眺めており、その中でモダニティの秩序の液状化が解放や自由の増大だけではなく不安、恐怖とそれに基づく暴力 (移民排斥のナショナリズム等) を伴うことをアウトサイダーの視点で批判的に観察していたように思われる。90 年代のバウマンを理解するためにはこの近い過去の歴史を再検討することが必要になるだろう。またそこには我々の社会の経験とも重なり合う部分があるという点でバウマンを読むことの意義を見出すことができるのではない。

バウマンは社会秩序の変容を解明しようとする中で、倫理や道德の問題にも関心を示している。バウマンにおける社会学者としての側面と哲学者としての側面の融合を多くの先行研究が指摘している。

バウマンは現実原則と快感原則をめぐるフロイトの定式を援用しながら、我々の直面するジレンマの源泉を、社会に組み込まれた諸個人の生がセキュリティ (安全・安心、秩序) と自由の不安定な均衡の上に条件づけられていることに見出す。すなわち、モダニティのシステムにはセキュリティ (安全・安心、秩序) の追求によって諸個人の自由が制限されるという不満、不安があり、一方ポストモダニティにおいては諸個人の自由の増大がセキュリティ (安全・安心、秩序) の喪失として経験されていくという不満、不安がある (この点は 97 年に発表された *Postmodernity and its Discontents* で詳しく論じられている)。バウマンによれば現在、倫理、道德の問題は、我々がすべからくこうした不安、不満に直面している事態を踏まえて考察されなければならない。*Postmodern Ethics* (93 年) での倫理的考察の根底には、合理的であるか否か、既存の法、規範に適合しているか否かという観点で正当性を判断されてきた近代的な倫理の硬直さへの疑い (ホロコースト論で展開される近代的合理性批判の継承) がある。ここでは紙幅の関係で詳しく論じることはできないが、バウマンは人間存在に本来的なアンビヴァレンスを自覚しながら、しかし相対主義的なニヒリズムへ退却する以外の道を探求することへと人々をいざなっているように思われる。

専門分化は現代の学術研究における必然的な傾向である。そうであるが故に、ディシプリンの壁を越え、社会のマクロな次元の問題とミクロな次元の問題とを大胆に架橋しようとするバウマンの仕事は注目されてきたといえるのではない。2003 年に刊行された *Liquid Love* では、モダニティの液状化によって人間関係、親密性がどのように変容していつているのかが論じられている。また、本報告書を作成している段階で既に、2004 年中にも *Wasted Lives: Modernity and Its Outcasts* や *Identity* というタイトルの著作が出版されることがわかっている。本研究で得られた成果を基にさらに研究を深めていながら、社会理論、社会思想の可能性を考えていきたい。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 向後剛「モダニティの秩序とアンビヴァレンスーバウマンの社会理論」『境界を越えて—比較文明学の現在』第4号, 立教大学比較文明学研究室, 2004年2月, 47-66ページ.